

Title	ハビトゥスの歴史的 research
Sub Title	Historical researches on the Habitus
Author	香田, 芳樹(Koda, Yoshiki)
Publisher	
Publication year	2012
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2011.)
JaLC DOI	
Abstract	本研究は、現代思想の重要な概念である「ハビトゥス」が、歴史的にどのように形成されてきたかを明らかにし、その現代的な意味を問うことを目的にしている。この目的のために取り扱った作家は、アリストテレス、プルタルコス、アウグスティヌス、トマス・アキナス、マイスター・エックハルト、ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク、ハルトマン・フォン・アウエ、トマージン・ツィルクラリア、ハンス・ザックス、カント、ルソー、メーヌ・ド・ビラン、デステュット・ド・トラシ、ビシャ、ラヴェッソン、ベルクソン、ノルベルト・エリアス、ブルデュー、和辻哲郎である。
Notes	研究種目：基盤研究(C) 研究期間：2009～2011 課題番号：21520340 研究分野：人文学 科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学(英文学を除く)
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_21520340seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月15日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520340

研究課題名（和文） ハビトゥスの歴史的研究

研究課題名（英文） Historical Researches on the Habitus

研究代表者

香田 芳樹（KODA YOSHIKI）

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：20286917

研究成果の概要（和文）：本研究は、現代思想の重要な概念である「ハビトゥス」が、歴史的にどのように形成されてきたかを明らかにし、その現代的な意味を問うことを目的にしている。この目的のために取り扱った作家は、アリストテレス、プルタルコス、アウグスティヌス、トマス・アクィナス、マイスター・エックハルト、ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク、ハルトマン・フォン・アウエ、トマージン・ツィルクラリア、ハンス・ザックス、カント、ルソー、メヌ・ド・ビラン、デステュット・ド・トラシ、ビシャ、ラヴェッソン、ベルクソン、ノルベルト・エリアス、ブルデュー、和辻哲郎である。

研究成果の概要（英文）：This research project aimed at making it clear how one of the most important conceptions of the contemporary thoughts “habitus” was conceived in the history of the western philosophy and culture. For this purpose it deals with several thinkers like Aristotle, Plutarch, Augustine, Thomas of Aquinas, Meister Eckhart, Gottfried of Strasbourg, Hartmann of Aue, Thomasin of Zirclaria, Hans Sachs, Immanuel Kant, Rousseau, Maine de Biran, Destutt de Tracy, Xavier Bichat, Ravaisson, Bergson, N. Elias, Bourdieu, Tetsuro Watsuji.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総 計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：ハビトゥス、習慣、再生、西欧哲学史

1. 研究開始当初の背景

個別の思想家の習慣論についての研究はいくつか存在する。しかし古代から中世を経

て、近代にいたるまでのハビトゥスに関する歴史的研究は、わずかに G. フンケの “Gewohnheit” (Bonn 1961)があるばかりで

ある。しかしここにも教育学者デューイや、ドゥルーズやブルデューの習慣論は扱われていない。また、従来の研究は「哲学の人間学」の視点からのハビトゥス研究であり、文化史的視点は欠落している。ハビトゥスが政治、経済、文化等さまざまな分野で、伝統的価値観を革新しながら、次世代へと漸次再編成していく視点は従来研究にはなかった。

2. 研究の目的

本研究は、ヨーロッパ思想史で近年注目を集めているハビトゥス（習慣）概念が歴史的に形成された過程を整理し、記述するものである。「ハビトゥス」は社会学者 P.ブルデューによって一躍脚光をあびたが、その歴史はアリストテレスにさかのぼる。彼の「習慣は第二の天性である」という定義をめぐってヨーロッパ精神史では人間本性(natura humana)と後天的獲得形質(habitus acquisitus)との関係が論議されてきた。中世ではトマス・アクィナスが形而上学で、デカルトが人体のメカニズムの説明で、またモンテーニュはモラリストの立場で、さらには19世紀にはフランス・スピリチュアリズムでメーヌ・ド・ビラン、ラヴェッソン、ベルクソンが競ってハビトゥスを論じた。また現代においてもデューイが教育学に、ドゥルーズが心理学に、N.エリヤスやブルデューが社会学にこの概念を援用している。彼らの論点はそれぞれ異なっているが、共通するのは習慣が単なる行為の繰り返しを越えて、人間の徳と、社会的道徳の重要な形成因である点である。例えば、先のアリストテレスの習慣の定義は、ギリシアの都市国家（ポリス）が国際化していく過程で発せられた言葉であるし、スコラ学が習慣を主題化した背景には、恩寵神学の見直しがあった。同様に、近年習慣論が脚光を浴びている背景には、大きな変革を経験している社会の時代的要請がある。それゆえ、医学や教育の分野では習慣は生活改善のための重要な因子とみなされ、経済の分野では人間の行動様式の解明が経済活動の予測につながるとされるのである。

しかし、こうした実践的諸科学へ習慣が援用されるためには、これがアリストテレスによって指摘されたように徳の根源であるという基本的理解がなければならない。すなわち善行は知性や意志より前に習慣と結びついており、習慣こそつとめて倫理的な行為であるということがあらためて確認されなければならない。それゆえ主題化されることが少なかった習慣をハビトゥスとして学術的に定位することは、主知主義と主意主義の間で形成された従来の西欧的人間観が陥った倫理的アポリアから脱することに寄与すると考える。このことは「美徳なき時代」（マッキンタイア）といわれる現代にとって一層

重要な意義をもつはずである。

3. 研究の方法

1)古代ギリシアからストア哲学、2)中世後期のスコラ神学と神秘思想、3)中世ドイツ文学、4)ドイツ観念論、5)フランス・スピリトゥアリズム、6)現代日本の6つの時代区分を設け、それぞれを代表する思想家のハビトゥス論を分析した。研究成果は学会発表を通して公表し、その後研究論文として公刊するというスタイルをとった。

4. 研究成果

本研究の目的は、「精神と肉体」という二元論に支配されていたかにみえるヨーロッパ精神史に、実は第三の極「ハビトゥス」が存在したことを、思想史的に証明することであった。アリストテレスが倫理学で「徳の完成」と定義した時、ハビトゥスは西欧倫理学の重要な課題となった。それは、プルタルコスが「徳は学び得るか」への答えとしてハビトゥスをあげたように、開かれた市民社会での人格陶冶の可能性と考えられたのである。

キリスト教倫理と封建制が支配的な西欧中世においては、徳をめぐる議論は制約を受けるが、それは中世後期以降、劇的に変化し、数多くのハビトゥス論が書かれる。その代表者はトマス・アクィナスであるが、従来彼のハビトゥスへの興味はアリストテレスの『ニコマコス倫理学』との出会いに始まるとされてきた。しかし、西欧におけるハビトゥスへの関心は、アリストテレスの翻訳以前にすでに始まっており、これが偶然の産物ではなかったことがわかる。科学は人間の成長を超個人的な恩寵の賜物とせず、そこへの主体的な関与の可能性を模索していた。それゆえ、正統神学へのプロテストと位置づけられるドイツ神秘思想も積極的にハビトゥスを主題化した。マイスター・エックハルトの基幹概念である「離脱」（Abgeschiedenheit）も神秘的概念としてだけでなく、習慣論の一つとして捉えることができる。

これと並んで、13世紀の大都市シュトラースブルクで書かれた市民文学『トリスタンとイゾルデ』には「技術・芸術」が英雄の条件として描かれているが、これはそれ以前の宮廷英雄叙事詩とは大きく異なっている。後者では、「徳」は「礼節」とならんで、まだ身分に付随するものであり、個人の努力によって獲得されるものではなかった。また15世紀以降、多くの『作法書』が書かれ、市民に好評を博したことも、N・エリヤスの研究によって明らかにされている。これは、新たな市民層が新たなマナーを社会的に習慣化しようとしたことを示している。それによって彼らは、神と身分制と封建的暴力組織から自己解放していったのである。

しかしこうした「文明化の過程」(エリアス)はその絶頂期において反動へ転じる。カントの義務的倫理学が道德の本質に定言的命令をみたように、ドイツ啓蒙主義は徳を再び精神内在的なものにした。理性に対する絶対な信頼が「人間何を為すべきか」を決定しているとするこの考えは、しかしながら、その信頼自体が盲目的で理性的ではない点で自家撞着である。ハビトゥス論の中でカントは反面教師の役割を果たすことになる。

イギリス経験主義の影響を受けたフランス哲学はこうした理性主義の陥穽を逃れて、徳の源泉を日常行動の繰り返し、すなわち「習慣」に求めた点で画期的である。ルソーは、感覚と件が精神に与える影響こそ人間を形成する要因だと考えた。人間の魂のもつ自立的原理などではなく、外的事物の物理的原理こそ重要なのであり、それを探ることができれば、人間の徳は成長するという考えは、メヌ・ド・ピランに受け継がれ、「受動的習慣」と「能動的習慣」として理論化される。彼はデカルトの実体的観念論に抗して、意志的・動的感覺主義に立ち、人間の思考機能の出発点を思弁的知性ではなく、感覚(sensation)、印象(impression)、知覚(perception)といった外界との緊張に求めた。感覚に与えられたこうした刺激を精神的な質へと変えるものが習慣なのである。

ハビトゥス論は、さらにフランス・スピリトゥアリズムによって、個人の精神的・社会的自己形成因としての地位を確立した。ラヴェッソンは有名な『習慣論』を書き、ベルクソンも『物質と記憶』で、記憶されたイメージを再現し、現実化するための努力として身体習慣を理解した。このように習慣を人間活動の主要素と捉えることによって、必然的に「身体」、「生活」、「感情」、「記憶」といった文化史的な要素が人間理解の対象となる。社会学者ブルデューが論じた、社会層とハビトゥスの関係もこうした文化史的考察の一つと位置づけられる。近年注目を集めている彼のハビトゥス論には、上記のような長い西欧精神史の議論の積み重ねがあることを本研究は明らかにした。

また文化史的な人間考察は、本邦においても和辻哲郎の環境的人間論を生んだ。彼は、ハイデガーの時間的人間論が「世界—内—存在」としての内在的自己を定立するのに異を唱え、「人間の第一の規定は個人にして社会であること、すなわち〈間柄〉における人であることである」として、「空間」を人間存在の根本規定とした。本研究を通して、気候や風土や家に個人が順応する過程において形成される道德を考察する和辻の倫理学が、「同じ集団に共通する経験の統一的な統合」をハビトゥスの定義としたブルデューの社会学と同じ軌道にあり、本邦におけるハビ

トゥス論の先駆と位置づけられることが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① Yoshiki Koda Japanese Philosopher Tetsuro Watsuji (1889-1960): His Cultural Anthropology and His Buddhist Thinking, in: Buddhism and Buddhist Philosophy in World Literature, Bangkok 2011, p. 39-52. 査読有り
- ② 香田 芳樹「美德の装い ―ドイツ中世の教育文学におけるイメージとハビトゥス―」『西洋中世研究』第3号(2011)、51-65頁。査読有り。

〔学会発表〕(計9件)

- ① Yoshiki Koda “Wütende Frauen – weinende Männer. Zur Inszenierung der negativen Gefühle in der mittelalterlichen mystischen Literatur” コロキウム『中世の感情』(慶應義塾大学三田校舎) 2012年1月29日
- ② Yoshiki Koda "Musst du dein Leben aendern?" Einige Gedanken zur Idee der Menschenreform von der mittelalterlichen Mystik bis zur Gegenwartsphilosophie. 招待講演(スイス・フライブルク大学) 2011年4月19日
- ③ Yoshiki Koda Reflexionen über die Reden der Unterscheidung Meister Eckharts und die Stadtgeschichte von Erfurt. 国際マイスター・エックハルト学会(エルフルト)、2011年4月15日
- ④ 香田 芳樹「和辻哲郎：その文化的人間学と仏教的思考」国際宗教学シンポジウム「仏教と世界文学」(チュラロンコン大学(タイ・バンコク)) 2010年11月25日
- ⑤ 香田 芳樹「ドイツ中世文学におけるヘテロトピアの言説」慶應大学コロキウム「ヘテロトピア」(慶應大学三田校舎) 2010年11月7日
- ⑥ 香田 芳樹「第二の天性の克服」慶應大学シンポジウム「ヒューマンプロジェクト」(慶應大学三田校舎) 2010年11

月5日

- ⑦ Yoshiki Koda Die Dominikaner-FranziskanerKonstellation im Prozess Meister Eckharts. 国際エックハルト学会（マインツ） 2010年9月11日
- ⑧ 香田 芳樹「中世文学とハビトゥス」 国際ゲルマニスト会議（ワルシャワ大学） 2010年8月2日
- ⑨ 香田 芳樹「スローターダイクの人間論とハビトゥス」 慶應大学研究会「ヒューマンプロジェクト」（慶應大学三田校舎） 2010年6月19日

〔図書〕（計 2 件）

- ① 香田 芳樹「真理を語る真理 ―マイスター・エックハルトの神秘的聖書解釈―」 『イスラーム哲学とキリスト教中世』 岩波書店 2012 年 305-330 頁。
- ② 香田 芳樹「マイスター・エックハルト生涯と著作」 創文社 2011 年 436 頁。

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計◇件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

香田 芳樹 (KODA YOSHIKI)
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号：20286917

(2)研究分担者 ()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：